

境界と縁

連歌師の旅日記『宗長手記』をめぐって

BORDERS AND ASSOCIATIONS

Socho Shuki-the Travel Diary of a *Renga* Master

岸 田 依 子*

Socho Shuki, a travel diary of the *renga* master Socho, covers a span of time of six years, starting with the 2nd year of the Daiei period (1522). It describes Socho's two trips between his home in Suruga and the capital, and his journeys to Echizen and Omi — the details serve well an inquiry into the life of medieval *renga* masters.

The trip between the countryside and the capital implies the existence of a border, but this is itself divided into a multitude of borders. The last part of the Muromachi period witnesses a strenghtening of the *shugo* system (by which each of the *shugo daimyo* was ruling over a part of the country) controlling the whole country — the control over land and people belonged exclusively to *the daimyo*, who were thus giving their possessions a status very close to that of a small country in itself. This is why in Socho's travels the borderlines between country and country are given more attention than

*KISHIDA Yoriko 京都女子大学文学部卒業。早稲田大学大学院博士後期課程満期退学。現在昭和女子大学文学部助教授。中世文学専攻。主な論文・著書に、「連歌の時空と構造 - <発句>様式の解析を基底として -」、「連歌と法会 - 結界・声明・回向 -」、「千句連歌集 六」共著（古典文庫第467冊）、「連歌総目録」共著（明治書院）、「新古今集古注集成」共著（笠間書院）など。

the natural borderlines of mountains, rivers, peaks and slopes ; and also this is why the *renga* poems in the diary are, more than often, offered not to the gods of the mountain or of the road, than to the respective country rulers.

Renga masters, being semi-priests, differ from the ordinary people — they belong to the border between the sacred and the profane ; their *renga* seances in the ruling *daimyo* castles and residences can be viewed as having a magic function of sanctuary. In this age of unceasing strife over and alteration of borderlines, when countries were in antagonist positions, *renga* meetings, based on common rules of composition as prescribed by *yoriai* and *shikimoku*, were a place where a different type of order and associations was brought about through the unification and harmonization of creative powers. As a meeting place as well as on the level of the creation process, *renga* was an art that brought the cosmic interrelatedness of things and the harmony to light.

The journey of *Socho Shuki* starts in the 75th year of Socho's life. It was a trip intended to make him spend his last days in the Syuon'an in Takigi related to Ikkyu, that is, for him personally it also was a trip from his birthplace to the place he wished to die in, the place he wanted to make the departure point to the other world. This paper is an attempt to look at these various borders and at their symbolic meanings.

1 はじめに

『宗長手記』は、大永二年（1522）より同七年にわたる、連歌師宗長の旅日記である。宗長は、文安五年（1448）に駿河に生まれ、享祿五年（1532）に駿河で没するが、その生涯は今川義忠に仕えた青少年期の駿河時代、三十代頃より四十代頃までの連歌師として修学し自立する京都中心の時代、五十代頃より七十代に至るまでの駿河・京都の頻繁な往還を中心とし旅に明け暮れる時代、

最晩年の駿河での隠棲時代、というように活動の場により四期に大別される。『宗長手記』は第三期にあたる七十代の日記・紀行で、『手記』には駿河・京都間の二度の往還が記されている。

室町後期は、守護大名が任国を領国として国内を一円支配する守護領国制がさらに強化された、戦国大名による大名領国制の時代であり、領内の土地・人民が完全に支配下に置かれた小国家に近い性格をもっていた。駿河と都を往還する旅の道行は、領国や領地間の境界を幾つも越えねばならぬ旅であり、旅の安全は旅のルートにあたる国々の領主や豪族などとの交流の有無に多くかかっていた。旅の先々での領主や豪族らによって興行される連歌会で、宗長は発句を献じて応えた。そのような交流を通して、旅の保護や経済的な支援を受けることもまた少なくなかったのである。

本論では〈境界〉というキーワードをめぐり、『宗長手記』を対象に戦国時代における境界の旅の諸相、および境界と連歌会の諸相について主に考察するが、上巻と下巻の境界や、文脈の境界など、作品に内在するその他の境界の問題についても些か言及することにした。また、〈境界〉は分立する二つのものの「間」にあって、分断する働きがある一方、連繋する働きをももち、両義性を有することから、後者の働きについても自ずと考察することになろう。そうした連関させ媒介する働きを、本論では〈縁〉という語で表した。「縁」には縁（へり）や周縁という意味もあるが、二つのものを連繋する働きである〈縁〉がつねに〈中心〉ではなく〈周縁〉において働き、〈周縁〉こそが二つのものを繋ぐ結節点であるという意味合いをも兼ねている。本論の題目が上記のような考えに基づいてのものであることを、最初にお断りしておきたい。

2 『宗長手記』と駿河・今川氏

まず、『宗長手記』の上巻・下巻の構成の問題についてであるが、上巻は大永二年五月から同六年三月まで、下巻は大永六年正月から同七年歳暮までの記事が記されている。大永六年正月から三月までの記事が、上巻・下巻で多少表

現を変えながらも重複するのであるが、上巻・下巻を合収した諸本が多い一方、上巻にあたる部分、下巻にあたる部分がそれぞれ単独でも伝わっていることから、上巻・下巻が本来それぞれ独立した作品であった可能性が高いと考えられる^①。

上巻は、齢七十を過ぎた宗長がみずからの死を意識し、彼岸への道行ともいべく、生涯崇敬した一休宗純のゆかりの地、山城の国薪の酬恩庵で末期を迎えたいという願いをもって上京する所から始まる。薪に到着し、酬恩庵を拠点に各地へも旅するが、大永四年五月伊勢の国亀山滞在中に今川氏親が病気のため帰国の要請があり、同年六月より六年二月まで駿河に滞在。大永六年二月、再び薪の酬恩庵に戻るべく駿河を出立、遠江の国掛川を経て同年三月三日見付で、今川了俊の孫堀越六郎邸で連歌会を興行する所で記事を終える。その折の発句は「花さきてなるてふ三の千とせ哉 今日、桃花のよせまでなるべし」とあり、祝言性の強い結びとなっている。

薪酬恩庵での末期を願い、かの地で生涯を終える覚悟でいた宗長にとって、大永六年の二度目の出立は再び帰国することはないという故郷との別れを意識したものであったと思われる。故郷との別れはまた、今川氏との別れをも意味する。二月九日には氏親の母北川殿に面会し暇乞いの挨拶をしている。また小川での千句の折も「当国、此会までの心ほそさ一しほおもしろかりしなり」とあり、饞別の会席のさまが記されるなど、全体的に惜別の情の濃い記述や場面構成となっている。下巻ではしかし、これらの部分がすべて削除され、かなり趣を異にしている。

上巻は見付まで、すなわち天竜川を境とし、その東手前までの記事で筆を擱いている。下巻は大永六年正月よりこの見付までの記事が上巻と大略において重複し、それ以降が下巻で新たに綴られる記事となるが、下巻の見付の記事に続く浜松の記事に「天竜河の西、浜松庄」とあることから、天竜川を境とし東西に分けて捉える意識が明確に存したことがうかがえる。天竜川以西が今川氏の領国遠江国と緊張関係にある三河・尾張国に接近する地域であり、つねに

戦闘が繰り返されていたことを想起すると、^②上巻は安泰の保たれた今川氏の領地内での記事で締め括られているのであり、上巻の末尾には郷国の駿河およびその大名である今川氏と別れ、そこに一つの区切りをつけようとする意識がうかがわれる。末尾が祝言性の強い結びとなっているのも、締め括りの意識に拠るものであろう。

一方下巻は、「大永六年、駿州にして、正月廿八日、天の原ふじやかすみのよもの春」の記事で始まり、上巻にはない「大永六年、駿州にして」という年号と場所が改めて記され、新たな意識での起筆のさまがうかがわれる。上巻では、大永五年の「除夜のあした」に続き、「おなじ二日のあした」「正月廿八日」と記事が並び、逆に「大永五年」からの続きとして捉える意識が強い。また下巻での、宗長の草庵柴屋軒のさまを記した、

同二月九日、こゝをたちて、宇津の山泉谷、年比しめをき行かよふ柴屋、石をたて、水をまかせ、梅をうへなど、普請のつるで、かたはらに又杉あり、松あり、竹の中に石をたゝみ、垣にして、松の木三尺ばかり、一方けづりて、

柴屋のこけのした道つくるなりけふをわが世の吉日にして

の記事は、上巻では「同十日、宇津の山の麓、丸子閑居、一宿して、作事など申つけ」とのみ記されるばかりで、「柴屋の」の歌もない。この歌は三条西実隆の『再昌草』の大永元年九月十四日ごろの条に、

宗長法師、柴屋に無常の所のあらましなど、過し三月、かまへ侍て

柴屋の苔のした道作るなりけふを我世の吉日にして

と、松木をけづりて書付たるよし、申をくりし返事に

たがうへも柴のやどりの露の世にけふ思ふべき苔の下道

とあり、実際は大永元年に実隆に宛てた贈歌であったことがわかる。しかし下巻の冒頭、駿河から山城の薪に向かう出立の場面に配すると、みずからの門出を祝し自庵に別れを告げ、松の木を削って今し方歌を書きつけているかのよう

に読めるのであり、故郷を去り再び末期の地と定めた薪に向かうという、旅の

新たな始まりの意識がうかがえる。柴屋軒に墓所の用意をすませるというのも、『手記』の文脈においては再び生きて帰ることはないという思いを暗示している。実際その旅は、今川氏の領国の最西端である浜名の海に至り、いよいよ三河との国境を越えようとする折の感懐を、

こゝをたちて浜名の橋。一とせのたかしほよりあら海おそろしきわたりすとて、此度の旅行までと、何となく心細く物がなしくて、

たびへのはまなのはしもあはれなりけふこそわたりはてとおもへばと綴るように、生涯最後の旅であることを覚悟するものであった。

以上のように、上巻・下巻の重複記事を比較すると、執筆意識の相違が明確になる。大永二年の折の薪酬恩庵での末期の願いを抱いての上京は、帰郷の要請によってやむなく中断されたが、大永六年再び上京する機会を得、今度こそ真に最後の旅立ちとして念願を果たそうとする決意が生まれたのであろう。大永二年の駿河出立以降二度目の駿河出立までの日々を一区切りとして締め括ることによって、大永六年の駿河出立が決意を新たにした最後の旅立ちとしての意味をもち得るのであり、出立の記事を筆頭に下巻を新たに起筆する意味もそこに認められる。上巻末尾と下巻冒頭の重複記事は、上巻と下巻のいわば境界であり、その境界はそのまま今川氏の領地の境界とも合致するのであるが、記事は重複しながらも文脈に流れる意識は異なるものであることが確認されよう。

さて、次章以下で『宗長手記』における境界と縁の問題について考察する前に、宗長の郷国である駿河とその領主今川氏について、境界性と縁の視点から注目すべき点について些か触れておきたいと思う。

まず今川氏の領国駿河は、地理的には京都と鎌倉を結ぶ東海道の間中にあり、関東との境界領域に位置している。宗長は出家後も今川義忠をはじめ氏親・氏輝の三代に仕えるが、竜王丸のちの氏親は、文明十一年に義忠の所領などを安堵する御判御教書を室町幕府前將軍足利義政より与えられ、これより氏親以降四代に互る戦国大名今川氏の領国支配が始まることになる。東海の広大な領域を支配した今川氏は、系図の上では氏親が中御門宣胤の女と結婚、氏親の姉が

正親町三条実望と結婚、氏親の女が中御門宣綱と結婚するなど、京都の公家社会と強く結びついており、都の公家や文人たちも多く駿河に下向・滞在している。今川氏はこのように、地方の武家でありながら、京都の公家との結びつきを強め、また京都の公家とともに京都の武家（幕府）との結びつきも強め、武家社会と公家社会の双方と関わりつつ、武家と公家、地方と中央の縁をとりもち政治的にも文化的にも大きな役割を果たしたのである。公家・武家をはじめ多彩な人々と交遊関係の多かった宗長の連歌師としての生き方には、こうした環境が有形無形の影響を与えていることは否めないであろう。

3 戦乱の旅・境界の旅

『宗長手記』に見える、宗長の旅路はどのようなものであったのか。

此国、折ふし俄に牟楯する事有て、矢作八橋をばえ渡らず。舟にて、同国水野和泉守館、荊屋一宿。 (大永二年・刈谷)

あのごとく、江州きのふより道ふたがるとなり。(中略) 又、こゝにも牟楯。軍の用意ひまもなし。江州蒲生の城、守護より退治、日数になりて、爰かしこ卒人あつまり、後詰の合戦たび〜ときこゆ。(大永二年・亀山)

おなじ国、亀山関民部大輔、今は何似斎、見参あらまほしき事ありて、路次申合、既罷出る折ふし、俄の合戦注進。おもふにかなわぬ世中、引返し、八峰たうげになりぬ。(大永六年・桑名)

群雄が諸国に割拠して相争う戦国時代の旅は、上の記事に見られるように、俄に勃発する戦乱のために通行ができず、予定していた経路の変更を余儀なくされることも多々あったことがうかがえる。

旧冬已来、京都右往左往。うつゝの事にもあらず。大永七、二月十二日・十三日、七条わたりの合戦。武田伊豆守代々粉骨の勝利をうしなはれ、さらば敵といふべきも誰ならず。丹波山家樵夫やうの者にや。

(大永七年・京都)

道中で戦乱の影響を蒙ることも多かったが、大永七年には前年より続く柳本

の乱のため京都近辺に居住することが難しくなり、遂には末期の地と定めた一休宗純のゆかりの地を離れ、駿河へ帰郷せざるを得なくなる。大永四年、氏親病気の知らせを受けての前の帰郷は、

京よりの人々、おなじく薪酬恩庵の僧達、帰のほられ侍る言伝に、

哀なる我ことづてや山しろの薪こるべき七十のはて

酬恩庵にして終焉の事を、申をくり侍る心なるべし。（大永四年・駿河）

宇津山の傍、年比閑居をしめをきて、五とせ六とせ京にありて、臘月廿六日に又帰り住侍らむとて

としの暮の薪こるべき門でのみうつゝの山のやどもとむなり

此門出は、山城薪まかりのぼらんの事なるべし。（大永五年・駿河）

とあるように、再度上洛する意思が度々記されており、一時的な帰郷として捉えていたことが知られる。しかし今回の帰郷は、京都の戦乱の情勢から見ても、年齢的な問題から見ても、再度の上洛は望み得ず、一休宗純ゆかりの地での末期の願いは諦めざるを得ないのであった。大永六年の「京都不慮のさはぎ何事とはきこえず。右往左往の躰耳にもめにもたゞあさましとぞきこえし」という言辞や、先の大永七年の記事の騒乱の首謀者である柳本賢治に対する「丹波山家樵夫やうの者」という蔑視は、細川高国に恩義のある宗長が柳本に抗する高国側に立って述べていることもあろうが、戦乱のために帰郷を余儀なくされたことへの無念さや憤りも込められていよう。

さて、戦乱のなかでの旅に加え、戦国大名の一円支配による領国は、それぞれ独立した小国家に近い形で分国統治されていたが、そうした領国と領国の境界を渡り歩く旅はどのようなものであったのか。

鈴鹿山の坂の下まで乗物。已下同行の衆、馬。其程ゐのはな・土山・内の白河・外の白河、かねてや伝へをかれけん、酒・さかな山中の興わすれがたし。所々送りの人出て、関々とがむるもなし。坂の下に着ぬ。亀山より又乗物たぶ。（大永四年・鈴鹿）

おなじ国津嶋へたち侍る。（中略）はしの本より、舟十余艘かざりて、

若衆法師誘引。此河づらの里へ―数をしらず。桑名までは河水三里計、舞うたひ、笛・つゞみ・大こ、舟ばたをたゞき、さゞずしてながれわたりし也。桑名よりむかへの舟、うたひのゝしり、さしあわせ、こぎちがへ、送迎の舟ひとつになりて、心もとなくぞをり侍し。(大永六年・津島・桑名)

近江から伊勢への国境にある鈴鹿峠、そして津島から桑名へと尾張・伊勢の国境を越える海の渡り、これらはいずれも境界であるが、送迎の手筈も整い、送り迎えの人々が時には融和し歓送歓迎するなかで無事国境を通過するさまがうかがえる。これらは、隣接する国々が互いに敵対関係にない場合の例である。

こゝをたちて浜名の橋。(中略) 此わたりまで、善六郎為清打をくり、(中略) 三河国今橋牧野田三、彼父、おほぢより知人にて、国のさかひわづらはしきに、人おほく物の具などして、むかへにとて、ことへ―敷ぞおぼえし。(大永六年・浜名)

遠江の浜名から三河の今橋へのルートは、「国のさかひわづらはしき」とあるように隣接する両国が敵対関係にある境界地帯であり、迎えの者が大勢武装して出迎えるなど物々しく緊張した気配がうかがえる。

雲津川、阿野の津のあなた、当国牟楯のさかひにて、里のかよひもたえたるやうなり。(中略) 此津、十余年以來荒野となりて、四・五千間の家・堂塔あとのみ。浅茅・よもぎが柚、まことに鶏犬はみえず、鳴鴉だに稀なり。(中略) 送りの人は皆かへり、むかへの人はきたりあはずして、途をうしなひ、方をたがへたゞずみ侍る程に(下略)(大永二年・安濃津)

安濃津(阿野の津)の付近は、南伊勢の北畠氏と北伊勢の関氏・神戸氏の南北の両勢力が対立する「牟楯のさかひ」であった。国と国の境、あるいは同じ国内でも勢力が対立している地域を連歌師が旅する場合、両勢力の者が送り迎えの時と場を決めて前哨の地に赴き、そこで連歌師の引き渡しを行ったとされるが、^③ここは見送りの北畠氏の被官は早くに帰り、関氏からの迎えの者は現れず、道に迷い荒野で立ち往生するさまが記されている。安濃津は、かつては港町として繁栄を誇ったが、明応七年の大地震で壊滅状態になり、大永二年当時

も荒廃したままであったようである。廃墟と化した一帯は、両勢力の間においていわば緩衝地帯のような境界になっていたのであろう。しかし境を越えて旅する者にとっては、そうした対立する境界の荒廃した空虚な地帯は危険の伴うものであった。

4 境界と連歌

『宗長手記』には、旅の折々での連歌会のさまが記されている。前章では国の境や対立する勢力により分断された地域の境を越えるさまを見たが、本章では今川氏の領国、駿河・遠江と対立・緊張関係にあった三河・尾張の国での連歌会に注目し、大永六・七年の記事を中心にその諸相を辿ることにしたい。

風雨に又一日ありて、国のさかひの城、鶴津山にいたりぬ。此鶴津山の館といふは、尾張・三河・信濃のさかい、やゝもすれば競望する族ありて、番衆日夜無油断城也。東・南・北、浜名の海めぐりて、山のあひへせき入、堀入たる水のごとく、城の岸をめぐる。大小舟岸につながせ、東むかひは堀江の城、北は浜名城、刑部の城、いなさ山、細江、舟の往来自由也。西一方山つゞきにて、敵の思かゝるべき所もなし。(中略) 三ヶ国の敵のさかひ、昼夜の大鼓夜番の声、無寸暇きこゆ。 (大永七年・宇津山)

「宇津山(鶴津山)」は、宗長が草庵を構えていた歌枕の「宇津山」ではなく、浜名湖の西に位置する地である。「鶴津山の館」は永正年間に今川氏親が築いた支城で、「国のさかひの城」「三ヶ国の敵のさかひ」とあるように、遠江と境を接し対立・緊張関係にあった隣国三河をはじめ尾張・信濃の三国に備え、遠江の領土支配の重要な拠点となっていた。「番衆日夜無油断城也」「昼夜の大鼓夜番の声、無寸暇きこゆ」とあるように、敵に備え警戒を怠らない物々しい国境の城のありさまが簡潔ではあるが写實的に描写されており、敵対・緊張関係の強さの程がうかがえる。

この遠江の宇津山城から三河の今橋に行く辺りは、前章で見た通り「国のさかひわづらはしき」ため、今橋城主牧野信成方の人々が大量武装して出迎えた

所であった。大永七年には、

今橋、田三宿所、一日。興行。こゝは古白已来年々歳々芳恩の所也。興行あわれにもむかしをおぼえて、老屈をわすれぬるなるべし。

けふさらにさ月まつ花のやどりかな

とあり、連歌会を興行している。今橋城は牧野信成（田三）の祖父成時（古白）が永正二年に築き、その後三河における今川氏の最大の軍事拠点として位置づけられるが、翌永正三年離反のためか牧野氏は戸田氏と所領を争い、戸田氏支援のため三河に侵攻した今川軍に攻められ成時は討死、今橋城は落城するのである^④。信成の父の代に今川家に属し再び今橋城に住んだようであるが^⑤、牧野氏と今川氏は離合を経てやや複雑な関係にあったのに対し、宗長は「古白已来年々歳々芳恩の所」とあるように、牧野氏とは三代にわたり連歌会を通して交流が続いたのである^⑥。

廿七日、尾張国守山松平与一館、千句。清須より、織田の筑前守・伊賀守・同名衆、小守護代坂井摂津守、皆はじめて人衆、興ありしなり。

あづさ弓花にとりそへ春のかな

新地の知行、彼是祝言にや。

（大永六年・守山）

尾張国守山は、東の今川氏・松平氏の勢力と、西の織田氏の勢力の接点であり、三氏の勢力の境をなす地であった。守山城は、大永初め今川氏親が尾張国清洲の斯波氏を監視するため名古屋台地の北端に築かせた那古野城に対抗して、大永元年頃に築城されたとされ、大永六年には松平信定（与一）が城主であった。その館で大永六年三月二十七日、「新地の知行」の祝いに千句連歌会が張行されたのである。この千句連歌の作品は伝存しないが、同じ折の発句が宗長の自選句集『老耳』に「尾州守山の城千句に」の詞書で「花にけふ風を関守山路哉」と見え、「守山」の地名とともに「関守」が詠み込まれていることから、対立する勢力に備えた前衛の地であったことが知られる。

信定の父長親は三河国安城城主であるが、永正初め西三河に侵攻した今川軍に反撃・抗戦を続け（井田野合戦）、辛うじて退却させている^⑦。大永七年、宗

長が長親の安城の館に宿泊した折、信定も守山より来て同宿しており、父子ともに交流があったことが知られる。大永六年の信定の館での千句連歌一座は、永正十五年に長親が妙源寺で宗長らを招いて連歌会を張行した^⑧その縁によるものかと思われる。

尾張では、守護斯波氏が遠江での今川氏との合戦に永正年間の後半二度にわたり敗戦し衰退しつつあったが、代わって守護代織田氏の勢力が次第に強化されつつあった^⑨。守山での信定主催の千句連歌会には、清洲から清洲三奉行を含む織田氏一族も参会していることが知られるが、勢力の対立した松平氏と織田氏が連歌会で座を同じくしていることや、宗長が反今川勢力である松平氏や織田氏とも連歌会を通して交流している点に注目されよう。これらは、世俗的には中立的立場にある連歌師ゆえに、また連歌会の場が世俗の場を超えたある結界性をもつゆえに可能なことであったかと思われる。古代の旅人は、旅の安全を祈って峠や坂などの境で神に手向けをしたが、戦国時代、一円支配の強い領国の国境を越えて旅する宗長の領主の館での連歌会の発句は、いわば領主への手向けであり、領主や領土を言祝ぐことによって戦乱の世の旅の安全を祈ったのである。

守山での逗留の後、宗長は熱田を経て清洲に赴き、千句連歌会で同座した筑前守（良頼）・伊賀守（九郎広延か）などの織田氏一族をはじめ、小守護代で織田氏家臣であった撰津守（坂井村盛）などの邸での連歌会に招かれ一座している。さらに続く津島では、正覚院に旅宿の折「領主織田霜台、息の三郎、礼とて来臨」とあり、同院の宿坊でもまた連歌会が興行されている。この織田霜台（信定）の子息三郎（信秀）は、六年後の享禄五年に先的那古野城を奪取し、それより二年後の天文三年には誕生したばかりの織田信長を城主にしている。また先に見た安城城主松平長親の玄孫が徳川家康であって、織豊・江戸の両時代が開かれる萌芽ともいべき気運がこの地に醸成されつつあったことがうかがえる。

織田信秀が那古野城を奪取した経緯については、『名古屋合戦記』に次のよ

うな記事が見える。那古野城城主の今川氏豊は連歌を愛好し、勝幡城城主の織田信秀を別懇の連歌仲間としていた。最初は互いに使者を立てて句を付け合っていたが、付合に時間がかかるうえ、使者が連歌懐紙を送達する折に懐紙を入れた箱を川に流してしまう事故もあり、やがて信秀を折々城内に滞留させて連歌を行うようになった。ところが、信秀は享禄五年に城内で騒動を起こし、奇襲作戦に敗れた氏豊是那古野城を明け渡し、京都へ逃奔したという¹⁰。敵の城を虎視眈々と狙う油断のならぬ戦国時代の権力闘争のさまがうかがえるが、この合戦記もまた、権力により分断された世俗的な境界を越えた所で連歌会が成立し、対立関係にある城主が一時的にせよ連歌の〈縁〉で結ばれるという、戦国時代の連歌会の一つのありさまを伝えていきわめて興味深い。

5 境界と通行・境界と縁

前章までにおいて、戦国時代における諸国や諸勢力の境界のさまや、境界地帯を越えつつ旅する連歌師の旅路、連歌会のさまなどを見てきたが、本章ではそれらの背景にある戦国時代の社会構造との関係について概観しておきたい。

まず、社会の縦の構造では、地位や身分などの差異により支配・被支配などの関係によって階級制社会が形成されていたが、その上下関係の縦の秩序を乱すものとして、中世に頻発した下剋上や一揆があった。下剋上や一揆は、いわば階級制により縦型に分断されたその境界を侵犯、あるいは縦断する行為であったと言えよう。次に横の構造では、国においては、それぞれの領国が一円支配によって領内の土地・人民を完全に支配下に置いた小国家に近い性格をもっており、そうした分国によって日本列島は横に分断されていたのである。また農村においては、村落を郷・村・組などの単位に組織する郷村制が成立し、それぞれの単位ごとに自治を基本とした独立性をもって分立していた。商工業においては、座を単位とした同業組合が発達し、座ごとに個別に独占的な特権をもって営業を行っていた。こうした領国や郷村や座などそれぞれの単位で分立した横の社会区分の境界を横断するのが、たとえば隣国や他国の領土への侵

攻・侵略や村落同士の境相論、また産業商業の発達や交通の発達に伴う商品の流通や人々の行旅・通行などであった。

さて、領国や郷村や座などの単位で分立したこれらの共同体^{コミュニティ}は、たとえば大永六年今川氏の領国で他の戦国大名に先駆けて制定された「今川仮名目録」に代表されるような分国法や、村法・座法・町式目など、それぞれの単位内での固有の秩序や法によって運営された。そうした固有の法によって独自に運営される共同体のあり方は、連歌の座のあり方とも類似しているものであり、連歌も連歌独自の「式目」によって会席が運営されたのである。さらに、先に見た縦の境界と横の境界の問題に立ち返ると、宗祇が『淀渡』で「老いたるは若きに交はりたるも苦しからず。高きは賤しきを避けぬもただこの道なり」と述べるように、連歌の座においては身分・階級などの世俗的な縦の境界を越えるというよりはむしろ無化し、一座する連衆が老若・貴賤などの別なく一つの円のうちに平等になる場であった。また百韻においては、『連通抄』に「一時に四季にうつり、月花を見、春夏秋冬一時に移行く事は連歌の徳也。其身は未だ捨てざれども隠家山深き居所閑居を求むる也。其身は未だ若き者なれども昔古を忍び、老衰へ年闌けて、更に身の便なき由を観ず」とあるように、現世的次元の時空の境界を無化し、連想によりあらゆる時空に移ることができるのであった。¹¹⁾百韻の各句は、それぞれ独立した一つの表現として横に連なるが、付合の世界は、前句と付句との間、すなわち前句表現と付句表現との境界に立ち現れるのである。前句の世界から付句の世界へと移る、その移り行きこそが連歌の生命でもあった。

僧体で世俗的にはどの階級にも属さず中立的な立場であった連歌師は、それ自身がいわば境界的な職能といえよう。宗長の場合は、たとえば武田信虎との和睦の交渉（永正十四年）などの講和の使者としての働きや、京都の公家と今川氏をはじめ地方の武家との古典籍の授受などの仲立ちなど、政治面や文化面において文字通り〈媒介〉や〈仲介〉の役割を担い、異なる二つの世界の〈縁〉を結びいわばネットワークャーとして機能していたのである。『宗長手記』にお

ける旅にもまた、〈縁〉を結ぶ〈媒介〉としての働きが認められよう。二つのもの間で橋渡しをする〈媒介〉の働きは、媒介者が二つのものの双方と関わりつつ、そのいずれにも帰属しないという境界性を有するがゆえに成立する働きである。社会が小単位で分立する中世、特に戦国時代において、連歌師が連歌会を通して果たした役割の意義はきわめて深いと言えよう。

6 文脈の境界——分断と連続——

『宗長手記』はジャンルとしては日記・紀行に分類されるが、その中には合戦記・説話風の小話・談論・笑話・消息文など種々の散文や、和歌・連歌・狂歌・俳諧・和漢聯句など種々の韻文が混在しており、また散文はそれぞれの内容に合わせて雅文・俗文・和文体・漢文体など種々の文体が混淆している¹²⁾。作品はほぼ日次で綴られているが、随所に合戦記や小話・談論など日記・紀行とは異なる記事が挿入されているため、全体の構成としてはやや未整理で雑然とした印象を与える。

たとえば大永二年の始めでは、駿河出立から掛川までが紀行文で綴られ、掛川逗留の記事から合戦記となり、その後再び紀行文に戻るという順序になっている。記録文に近い漢文調の合戦記が殆どなまの形で紀行文の途中に置かれているため、前後の紀行文が合戦記の挿入によって分断された形になっているのである。なぜ、紀行文の文脈を中断して合戦記を配置しなければならなかったのか。掛川から合戦記を挟んで浜松・浜名・豊橋に至るまでの記事内容を、もう少し詳細に検討することにしよう。

まず掛川では、掛川城主朝比奈泰能亭に逗留する。掛川城の新城は、折しも普請の最中であった。その様子を眺めつつ、宗長は泰能の父、初代の城主泰熙の築城の苦勞を偲び、次いでそれに触発されてであろうか、今川義忠・氏親二代、および今川氏家臣であった泰熙を中心とする朝比奈氏一族がともに結束して戦い、勝利を得るに至った苦難と武勲の歴史を回顧し、回想の形で合戦記を綴るのである。

合戦記は、まず文明八年から永正十四年に至る、斯波氏被官大河内貞綱の一連の反乱に対する鎮圧のさま、次いで文明六年から明応八年に至る、遠江国奪回の奮戦のさま、そして永正十五年の三河国境に築いた船形山の砦奪回のさま、最後に掛川城が朝比奈泰以の補佐を経て泰能に引き継がれたことを記して終わる。これより回想から現在に戻り、最後の掛川城の泰能への引き継ぎの記事が、先の紀行文の掛川城の記事につながるのであるが、それとともに合戦記全体は、掛川城が一連の苦難と苦闘の歴史を経た上で遠江国経営の拠点として今日存在するのだという意味付けをもって、前の掛川の記事につながって行くのである。また船形山の砦奪回の折の、浜名湖を渡り豊橋に至るルートは、宗長がこの先行く旅のルートでもあって次の紀行文と関連する一方、この一帯が戦闘に勝利した今川氏の統治に守られての旅であることをうかがわせる。一見すると分断されているかに思われる記事の配列であるが、意識の流れの上では連続しているのであり、大河内の反乱と遠江の奪回の二つの記事が年代順の配列でないことも、意識の流れの方に重点を置いたためではないかと考えられる。

もう一例、大永二年の旅の終わりの記事を見てみよう。

長谷寺・多武峰・興福寺・東大寺などを巡り、ようやく薪の酬恩庵に到着するまでを紀行文で綴り、その後は歳暮まで主として酬恩庵滞在の日々を記するのであるが、「薪酬恩庵にはふへつきぬ」とある文に続き、まず知友であった尺八の名人紹崇が伊勢の二見の浦で入水した一件を記している。「南都にてつたへ聞き事なるべし」とあることから、奈良ですでに伝え聞いてはいたが、先の合戦記の場合と異なり一連の紀行文の途中には差し挟まず、目的地薪酬恩庵に到着した所であらためて書き留めているのである。紹崇については「紫野大仙院四・五年もありて」とあり、大徳寺の塔頭大仙院に一時いたことがあるという。大仙院の東隣にある真珠庵は、一休宗純を開祖とする塔頭である。また、一休が尺八を殊に愛好したことは『狂雲集』『狂雲詩集』などでよく知られる。この紹崇の記事は、意識の流れから見れば、奈良で聞いた話という点で先の奈良の紀行とつながり、大徳寺・尺八という縁で、一休ゆかりの寺酬恩庵滞在の

日々を記す後の記事とつながっていると考えられよう。

一見すると雑多な記事が無造作に配置され、多様な記事が混在して文脈が分断されているかのように見えるが、意識の流れの上では連続している例を僅かながら見てきた。一つ一つの記事が個々に分立し、文脈上の境界があるかに見えながら、それぞれの境界が意識のレベルで連関しているさまは、連歌における付合に通うものがあり興味深い。

「境界」と「縁」というキーワードをめぐり、『宗長手記』を対象にさまざまな考察を試みてきた。さらに精細な検討を要する問題も残されているが、今後の課題として考察することにした。

注

- ①『宗長手記』（岩波文庫）解説（島津忠夫著）でも、上・下巻はそれぞれ単独に流布したものと想定されている。なお、『宗長手記』の著作意図を自称の考察から論じた論考に、岩下紀之「『宗長手記』の著作意図について」〔『国文学研究』1978年6月、『連歌史の諸相』（汲古書院・1997年）所収〕がある。
- ②『宗長手記』に回想記として記される文亀元年の堀江城の戦いや、永正十年の引馬城の戦い、深嶽（三岳）城の戦いなどを経た後、『宇津山記』（祐徳神社蔵本、古典文庫第443冊）の記事に「同四・五月のほどより天竜川をへだて、武衛于時治部大輔義達、参河国ざかひ浜松庄引間といふ地に、国の牢人以下七・八千楯籠る。去年の冬より此夏まで矢軍まで也。此川五月雨の洪水にして、六月中旬舟橋をわたり、うちこさるべきのための千句。発句、水無月やかち人ならぬせゝもなし。八月十九日に終に敵城せめおとされ、生捕かれこれ千余人とも聞し」とあるように、今川氏親は永正十四年、五月雨で洪水となった天竜川に舟橋をわたりて引馬城に出陣し、遠江国を奪回するのである。しかし奪回後も、特に国境付近の地域においては三河国とつねに緊張関係にあったことは、翌永正十五年の舟形城の戦いのさまを記した『宗長手記』の「氏親入国、静謐とはいへども、隣国の凶徒等たゆる事なし。参河の国堺ふなかつといふ山に、味方あり。田原彈正忠・諏訪信濃守已下牢人衆催し、舟方の城うち落す。（中略）泰以時をうつさず浜名の海波海して、則うちおとし、数輩討捕」などの記事からうかがえる。
- ③鶴崎裕雄「『町』を往く連歌師——地方史研究における紀行文の有用——」（地方史研究協議会編『日本の都市と町——その歴史と現状——』、雄山閣・1982年）、『東海地方国人一揆の諸様相』（有光友学編『戦国期権力と地域社会』、吉川弘文館・1986年）など参照。両論文とも、鶴崎裕雄『戦国の権力と寄合の文芸』（和泉書院・1988年）所収。
- ④久保田昌希「氏親の遠江平定と近隣の国々」（『静岡県史』通史編2 中世、第三編第一章第二節、1997年）、新行紀一「岡崎と安城の松平家」（『新編 岡崎市史』中世2、第三章第一節、1989年）参照。
- ⑤『寛政重修諸家譜』巻第六五二。
- ⑥宗長と牧野氏との関係については、鈴木光保「三河における宗長覚え書き」（『松村博司教授退官記

念国語国文学論集』、1973年)に考察がある。

⑦注④新行紀一、同書同節。

⑧永正十五年四月二十三日興行、「山何百韻」。なおこの折の百韻には、信定の名は見えない。

⑨初期の織田氏については、奥野高廣「初期の織田氏」〔『国学院雑誌』1961年9月、『織田信長文書の研究』上巻(吉川弘文館・1969年、増訂版1988年)に一部改稿、所収]、大嶋俊子「宗長の周辺(中・その二)」〔『女子大國文』1964年5月)、新井喜久夫「織田系譜に関する覚書」〔『清洲町史』第三、1969年)など参照。なお、宗長の尾張における連歌会については、鶴崎裕雄「尾張熱田宮における連歌師宗長——神宮文庫蔵本「何人 大永七年卯月二日於宮滝坊」紹介——」〔『帝塚山学院短期大学研究年報』1973年12月)に考察がある。

⑩『明良洪範』卷之十にも、同じ話が見える。

⑪連歌の時空と構造の問題については、岸田「連歌の時空と構造——〈発句〉様式の解析を基底として——」〔『国文学研究』1987年3月)参照。

⑫宗長の文章については、島津忠夫「連歌師の文章」〔『連歌の研究』第五章二、角川書店・1973年)、岸田「『宗長日記』の構成——悲話と笑話の断章をめぐって——」〔『早稲田大学大学院文学研究科紀要』別冊、1981年3月)に考察がある。

*『宗長手記』の本文引用は、島津忠夫校注『宗長日記』(岩波文庫、1975年)による。

討議要旨

鶴崎裕雄氏より、永正17年頃に今川氏親の遠江遠征が完成するが、その間、宗長は遠江を通らず、甲斐から信濃を経て京に行く道をとっており、遠征が終わって後は東海道を通っている。発表で、宗長の中で天竜川を境として捉える意識があったという興味深い指摘があったが、これも意識の一つとして考えると面白いのではないか、という意見が提出された。さらに、同氏から、浜名郡羽鳥荘に関する室町幕府と今川氏の手紙のやりとりについて、宗長が関与していたことが「飯尾文書」にあるとの指摘があった。また、「手記」の中に混在しているさまざまな文体のなかに説話があげられていた点について、他の紀行に多く登場する説話がないのが「手記」の特徴と捉えているが、どう考えるかという質問がなされた。これに対して発表者からは、「手記」の中にあるのはいわゆる説話ではなく、無名に近い人の悲話や笑話の一つの完結した話としてでてくるもので、いわば説話風の小話であるという返答があった。

松村雄二氏より、連歌師の文学作品を腑分けする以前に、連歌師全体が境界的に生きる人間であるということはどう捉えたらよいか、という質問がなされた。これについて発表者は、連歌師の〈境界性〉の深層の意味や価値については避けて通れない大きな問題と考えており、今後さらに深く考察すべき課題として受けとめたいと返答された。